

ベルよりも成績が目に見えて落ちており、よりよい学習機会にもかかわらず、語学力が身に付いてないという、奇妙な結果になっている。

以上の問題を踏まえて、集中ロシア語の授業では、次のような対策を考えている。

教科書と有機的につながったオーディオ・ビデオの教材を用いる。

そのために、よい教科書を選定し（集中コースの教科書は現状では少ない）、必要なら補助教材を自分たちで作成する。さらに、作成したものをプリントではなく、大学で印刷出版するようなことも必要。

今後の課題だが、修了時点での短期の語学コースの参加を授業に組み合わせれば、いっそう効果は上がるだろう。

IV. 初修中国語集中授業前期の成果

笠原ヒロ子

初修中国語の集中授業における学生の授業参加と試験の結果について論じる。2名の教師が、週2回ずつ授業を担当し、互いに連絡を取りながら、同一の教科書を使用して、授業を進めた。使用している教科書は、1課が1文章8文字前後からなるA、B各4文章前後の対話文で構成されている。

内容は、対話活動の練習が、無理なく、合理的に進められるもので、始めて中国語を学ぼうとする者が、抵抗少なく入ってゆけるものである。

授業は、聞き取る訓練と言い伝える訓練が主体になった。音が意味を持って認知され、音の連続による内容を把握し、且つそれを基として、対話活動を行った。

中国語では、漢字を用いて、文章として表現される。日本人である学生が、所謂漢文読みを避け、出来る限り音によって内容を把握するよう促すため、大意にそぐわない範囲でなければ、“可”としながら授業を進めた。そのためには、文法に触れずに語句の説明のみで、あるいは、日本語から類推可能な場合には、時によっては、語句の説明すら行わずに、対話活動を進めた。

上記の授業を経てきた学生の授業活動への参加状況を基に、試験結果から、問題点を明らかにしてみる。

1. 31名中、10名が60点から69点の範囲内にあり、11名が85点以上にあつて、かなり成果を見た層と、さほど成果を見なかった層の二手に顕著に分かれている。
2. 授業不参加（欠席）0回で60点台が2名、70点台が4名、不参加2回で60点台が1名計7名の存在を見る。